

Title	M. Beer: A History of British Socialism. Vol. I
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ても、自殺は自然の偏向に反し、又た彼れが自己を愛す可き仁慈に反す。斯くて又た、自殺は自然法及び仁慈に反するを以て、常に重大なる罪惡なるが故なり。第二、總べて部分の存在は悉く全體の存在の一部なり、然も、凡ゆる人間は社會の一部なり、斯くて又た彼れの存在は社會の存在の一部なり、是れに由りて、彼れの自殺は社會に損害を加ふるが故なり。第三、生命は神に由りて人間に授與せられに賜にして、生殺與奪は神の權域に屬す、而して是れに由りて、自己の生命を奪ふ者は神に背くの罪を犯すものなればなり。(Summa, 2a, 2ae, qu. 64, art. 5.)

六

而して近世の始期に至り、人法は神法に背反す可きものに非ず、神は吾人自身をも、他人をも殺すの力を許與することなしと論じたる St. Thomas More は、不治の患者にして、其の生存が單に彼れに取りて苦惱に過ぎざる時、僧侶

と長官とは彼れを説きて、其の希望に由り、牢獄に等しき生命を脱離せしむるを得べきことを主張せり。然れども其の他の自殺者は正當なる葬儀を受く可きものに非ざるなり。此「無有郷」篇中に表明せられたる所と幾分類似せる慣習は Mastia (今のマルセーユ) の希臘植民地に於て事實行はれたる所なりと謂ふ (Valerius Maximus, II. 6.) (Ritchie, p. 126. 拙著「經濟學史研究」(一九二〇年版)一二九—一三〇頁)。

之れを要するに、人生はより高き目的、即ち、道德的善行、義務の履行、徳の爲めの徳を認むる者に取りてのみ惟り眞の價值あるなり。換言すれば、人生は其れ自體に於て目的に非ずして、一の手段なりと思惟する者、即ち理想主義者に對してのみ惟り價值あるなり。彼れに取りては徳は至高の善なり。而して徳は惟り活ける實在によりてのみ實現せらるゝを得。斯くて、人生其の者は徳、即ち至高善の手段にして且つ必須の條件たるを以て、相對の善にして、至高の善に非ずと觀せらるるなり。(一九二〇年十二月)

新刊紹介

M. Beer: History of British Socialism. Vol. I

London: G. Bell and Sons, Ltd.

物の生ずるは必ず因由あるに依る。Robertus, Marx 等の社會主義は Smith, Ricardo 等の所謂正統學派の經濟學と極めて密接な關係を有する。近世社會主義の思想的根源を探索する時

は、遠く希臘羅馬の共產主義的思想を尋ねる必要があり、古代の *ius naturale* の思想は其の内容に於いて多少の變遷があつたとしても尙ほ近世に迄及んで居る。此の見地より見て M. Beer の近著「英國社會主義史」第一卷は極めて興味多き讀みものたるを失はぬ。云ふ迄もなく第一

卷は第二卷を待つて始めて完璧たるべきものであるけれども、R. H. Tawney が本書の序言に云へるが如く這般の世界大戰の爲めに個々に發行されたのである。今や第二卷の刊行を見るに至り、Tawney の所謂「最も完全なる英國社會主義思想の發展の記録」を有するに至つたのは學界の爲めに慶すべきことである。Beer はすでに獨文にて英國社會主義史を作つて居るが、彼自身の Preface に云ふところに依れば全然新に稿を起し、新しき材料に依つて増補したものである。

本書は全編を二つの部分に區別して居る。第一の部分は「中世共產主義」と題し、基督教の共產主義的思想を簡単に論述し、次いで是が英國に及ぼせし影響に筆を起して、自然科學的傾向を有し來たりし近世の初期に終る。即ち此の部分は多少 Utopian Socialism の記述はあるけ

れども、資本主義勃興の時代であつて、其の下に於ける社會主義に類似した政治思想を述べたものであると云つてもいいだらう。

第二の部分は一七六〇年より一八三四年迄の思想の發展を述べて居る。産業革命が惹起して、資本主義が隆盛の極點に達すると、こゝに勞働者の自覺を生じ、やがて反資本主義の萌芽となる。Ricardo 等の經濟學說が却つて社會改良の導火となり、偉大なる社會改良の實行者 Robert Owen の影響と相俟つて、次第に社會主義的傾向の色彩を濃くし、所謂 Chartist の運動となり、一八三五年 Municipal Reform Act が上下兩院の論題となり、勞働者の政治運動がやがて本來の Chartist の運動を起さんとするところにて終りを告げて居る。従つて近世社會主義の英國に於ける狀態を知らんと欲する者は第二卷を繙かなければならない。

本書は主として政治經濟等の實際運動よりも思想的背景に力を注いだ傾向がある。時代々々の代表的個人に就いて一々其の著述學說を紹介し、而も比較的統一されて居る點は蓋し著者の技倆と云へるだらう。殊に各時代の社會思想を表現するのに巧みに興味ある文學的著作を引用したのは、兎もすると無味乾燥になり勝ちの此の種の著作をして其の弊を免れしめた所以であらう。唯此の種の著述として止むを得ないことも知れないが、ある個人に對して、多少偏頗に省略したり、誇張したりしてあるやうに思へる。例へば Malthus に關する記述の如きは省略に過ぐる例證であらう。其の他社會主義の歴史として其の思想的萌芽を説明するに餘りに多くの頁數を費し過ぎはしないか。若し前提に是だけの頁數を費すのならば、Proper である第二卷が本書より僅かに五十頁の増加に過ぎないのは

少しく不當のやうに思へる。然し乍ら兎に角本書の如きは吾人日本人にとつて極めて有益な書物である。我が國の社會運動はある點に於いて、甚だ英國に類似して居る。本書の如きは此の意味に於いて吾人の踏み行く途を暗示して呉れるものである。著者が Preface に於いて本書の目的は實際問題の救濟藥を提供すると云ふよりも寧ろ社會、政治等の學徒を刺激するにあると云つて居るが、余は我が國の學徒が本書に依つて眞面目なる研究に刺激せられんことを希望する。(野村兼太郎)

ペアー 英國社會主義史 第二卷

M. Beer:—A History of British Socialism

Vol. II. 15/—

ペアー氏の英國社會主義史第二卷は千九百二十年を以てロンドンに出版された。その叙述

した所はチャーチズムの運動に初まつて千九百二十年に至る英國社會主義史である。故にこの書は近代社會主義運動の英國における主要な要素を全部包含してゐると云つていいのである。第一卷においてロバート・オーエン並にチャーチズムの誕生にその叙述の筆を擱いた著者は第二卷に至つてチャーチズムの運動を語ることに頗ぶる精細なるものがある。チャーチズムの勃興からその教義、その組織、その最盛期、その道徳的影響等百九十數頁に涉つて論述され、第二卷の一半たる第三部は全部チャーチズム運動の爲めに費されてゐる。

その第四部はチャーチズム運動以後の社會主義、即ちチャーチズムの熱烈なる運動の千八百四十八年に於ける潰滅から、勞働運動に溫和的傾向が齎らされ、産業界並に思想界に自由主義が跳梁跋扈した時代から、千八百八十年代にお